太宰府人物志

資料室だより㊱

円珍

円珍は、弘仁5年（814年）、讃岐国（現香川県）那珂郡に生まれました。彼が求法巡礼のため、唐へ渡ったのは、仁寿3年（853年）7月のことでした。在唐すること5年、円珍は天安2年（858年）に帰国します。滋賀県大津市の三井寺（園城寺）には、円珍ゆかりの品々、古文書などが遺っています。去る4月1日から5月10日まで、福岡市博物館において「国宝　三井寺展」が開催されましたので、ご覧になった人も多いかと思います。これは、平成20年が円珍の帰朝1150年に当たることを記念して、昨年から今年にかけて、東京・大阪・福岡の3会場で行われた展覧会です。

この「三井寺展」には、仁寿3年、渡唐の際に、大宰府から与えられた公験（渡航許可証明書）、円珍自らが記録した入唐の日記『行歴抄』の写本などが展示されていました。これらによると、円珍は大唐商人王超・李延孝らの船に乗り込み、唐をめざしたことが知られます。そして帰国の際にも、李延孝の商船に乗り、台州を出発、五島列島を経由して大宰府鴻臚館に到着しています。

さらに円珍関係文書の中には、円珍と親交の深かった唐人らが日本滞在中に詠んだ送別詩や円珍宛の書状が含まれています。ことに送別詩の一首には「昨日、鴻臚北館の門楼に遊行す」と題するものがあります。現在も継続して進められている福岡市鴻臚館跡の発掘調査においては、「南館」区と「北館」区が設定されていますが、史料的にはこれに拠っているのです。

これらの円珍関係資料によれば、たとえば「円珍大宰府公験」や「鎮西府公験」などは、海外渡航の際に大宰府の果たした役割を考える材料になりますし、また、送別詩や書状などは日唐の文化交流の具体的な様子を示すものとなるでしょう。以前にもこの欄でふれたことがありますが、実は大宰府について、その対外的な文化交流を語る史料は必ずしも多くはありません。しかし、こうした史料を手掛かりとしながら、奈良～平安時代における大宰府の具体的な役割を考え、さらに中央（都）における関連史料を参照しながら、文化的交流の検討を進めたいと考えています。

市史資料室　重松　敏彦